

# ドクター板東の メディカルリサーチ

Vol. 69

～人口や 寿命で世界 変革し～



<http://hb8.seikyou.ne.jp/home/pianomed/>

今年は2011年だ。

2010年度の様々な統計が発表された。この中には、5年ごとの集計なども含まれる。医療分野では、特に人口や寿命のデータが興味深い。なぜなら、これらの数値が、世界の経済や社会にも大きく影響していくからだ。

日本の特徴として、少子高齢化が知られる。それも驚くほどのスピードであり、世界一と称されるほどだ。今回は、命や健康を社会的尺度で考えてみたい。

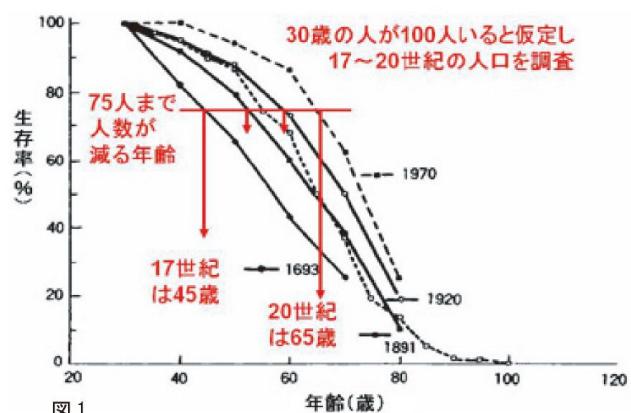
## 人の寿命は

人の平均寿命を考えるとき、大切なことがある。発展途上国で平均寿命が低いのは、乳幼児から10歳代で死亡する人々が非常に多いためだ。20歳を超えると、病気で命を落とす確率はぐつと減る。

30歳の人口を基準として17～20世紀の寿命を示した（図1）。時代とともに曲線が次第に右側に寄っていく。100人が75人まで減る年齢は、17世紀が

## 日本で寿命の延長

それでは、我が国では、どれほど寿命が伸びてきたのであろうか？ 1947年～2005年における寿命の変化を図2に示した。10万が生まれたと仮定し、年齢をグラフでチェックしてみてほしい。1947年は60歳、1955年は64歳、1975年は68歳、2005年は72歳だ。年齢の人々が、その後何年生きるかを計算した年数を表す。専門用語では、「平均余命」とは、ある年齢の人々が、その後何年生きられるかという期待値のこと。厚生労働省の平成22年簡易生命表から表1



## 平均余命とは

さて、平均寿命とは、その年に生まれた0歳の人が何年生きるかを計算した年数を表す。専門用語では、0歳における「平均余命」だ。「平均余命」とは、ある年齢の人々が、その後何年生きられるかという期待値のこと。

がりとなっていく。そして、10万人の中で8万人が80歳まで、5万人が90歳まで生きたとすれば、理想かもしれない。いわゆる、ピンピングコロリ（PPK）に近いものとなるう。

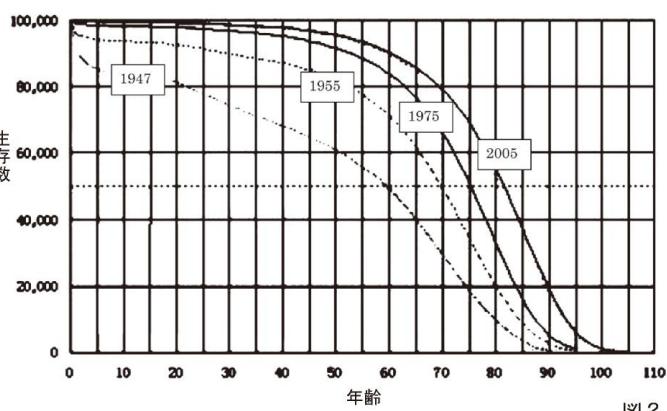


図2

遠い将来には、本曲線はどうなるだろうか？

世界の寿命は

平均寿命は日本が世界のトップランナーであるのが広く知られている。それでは、他の国々と比較してみ

男性の平均寿命は79歳だが、60歳男性の人はあと平均23年生き、70歳では15年、80歳では9年、90歳では4年となる。2011年7月に発表されたデータによると、日本人の平均寿命は男性79・64歳、女性86・39歳だった。女性は前年を0・05歳下回り、猛暑による熱中症や心疾患の影響が推測されるが、ずっと世界を継続中だ。

64歳だが、60歳男性の人はあと平均23年生き、70歳では15年、80歳では9年、90歳では4年となる。2011年7月に発表されたデータによると、日本人の平均寿命は男性79・64歳、女性86・39歳だった。女性は前年を0・05歳下回り、猛暑による熱中症や心疾患の影響が推測されるが、ずっと世界を継続中だ。

年齢	主な年齢の平均余命 (単位: 年)	
	男 平成22年	女 平成22年
0歳	79.64	86.39
10	69.94	76.67
20	60.07	66.75
30	50.41	56.92
40	40.81	47.17
50	31.51	37.61
60	22.84	28.37
65	18.86	23.89
70	15.08	19.53
75	11.58	15.38
80	8.57	11.59
85	6.18	8.3
90	4.41	5.76

表1

世界の平均寿命は、毎年いろいろな記録が発表されたりも、平均値で比較し誤差が少ない数値を選択した。

表2は国際連合による統計で、2005-2010年の平均寿命を解析したもの。193の国と地域から上位10個を抜粋したもので、日本、香港、スイス、アイスランドと続いている。世界の平均値は、現在67.6歳となっている。

## 寿命は百歳まで？

寿命とは、どの程度伸びるものだろうか？

今後、我が国の寿命はさらに延びると予想されている

順位	国及び地域	男女総合	男	女
	世界の平均	67.6	65.4	69.8
1	日本	82.7	79.0	86.2
2	香港	82.2	79.4	85.1
3	スイス	81.8	79.3	84.1
4	アイスランド	81.8	80.2	83.3
5	オーストラリア	81.5	79.1	83.8
6	フランス	81.2	77.6	84.7
7	イタリア	81.2	78.1	84.1
8	スウェーデン	80.9	78.7	83.0
9	スペイン	80.9	77.6	84.1
10	イスラエル	80.7	78.6	82.8

表2

高齢者の疾病としてガン、心臓病、脳卒中などへのアプローチが進んでいるからだ。日本を含む先進国では、将来2000年以降生まれの人々の多くが100歳に到達できるだろうという論文が発表された（図3）。ただし、これには、支持および反論する意見の両者がみられる。

このように、科学的医学論文には常に両者があるのが通常だ。しばしば、TV番組などで、一方の説だけを強調される場合がある。しかし、医科学者は、常に

全体の意見をみながら、冷静に評価し判断しなければならない。

## 高齢化率

ここで、クイズを一つ。「高齢化社会」「高齢社会」「超高齢社会」などとよく似た3種の言葉が使われている。この違いとは何だろうか？ 現在の日本は、どれに相当するのであろうか？

「高齢者は65歳以上」と国連で定義がなされ、全人口に対する65歳以上の人口比を「高齢化率」と呼ぶことになった。3つの用語の意味を表3に示す。

日本では急速に高齢者が日本に追随してきているのが、お隣の韓国である。両国には以前25年の開きがあったが、今後さらに縮まっていくことだろう。

なお、2015～2050年の数値は推測されたデータとなっている。たデー<sup>ト</sup>タ<sup>ト</sup>となっている。2050～55年には人口の4割が高齢者となる我が国は、果たして、社会福祉制度などを、うまく状況に合わせていくことができるだろうか？

## 高齢者を支える

高齢化のメカニズムとして、「人口転換」が知られる。国や地域の人口構成は、発展途上段階から経済成長をしていくに伴って、

多産多死型→少産少死型へと変化する。しかし、医科学者は、常に

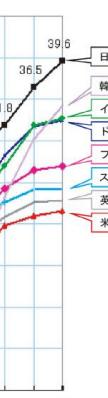


図4

増え、現在は「超高齢社会」である。それも、世界に類をみないスピードで高齢化が進んでいることがわかる（図4）。

日本に追随してきているのが、お隣の韓国である。両国には以前25年の開きがあったが、今後さらに縮まっていくことだろう。

この場合、子供が減少し、増加する高齢者（65歳以上）を支えているのは、15～64歳の「生産年齢人口」と呼ばれる人々である。

高齢者を支える状況を表4に示した。1960年には、一人の高齢者を11.2人（西暦昭和45年）支えた。その後2010年には2.8人（西暦平成22年）まで減ることになった。

近年、社会保障制度の改革が叫ばれているが、すべての人に有効で妥当な制度は簡単に構築できない。

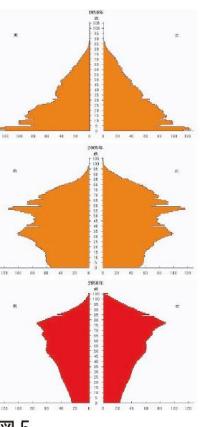


図5

西暦	人数	
昭和 35	1960	11.2
45	1970	9.8
	1980	7.4
	1990	5.8
平成 12	2000	3.9
	2005	3.3
	2010	2.8
17	2015	2.3
22	2025	2.0
37	2035	1.7
47	2045	1.4
57	2055	1.3
67	2065	

（板東浩、ばんどうひろし、医学博士、糖尿病専門医、ピアニスト）

2055年には1・3人で支える社会となってしまう。今後の対策に期待したい。

いろいろな記録が発表されており、各種のデータをリサーチして比較してみると。单一年度のデータよりも、平均値で比較し誤差が少ない数値を選択した。